朱印船貿易・日本町関連書籍所載地図
タイ部分の表記について

川　口　洋　史

はじめに

本稿は蓮田隆志氏の問題提起［蓮田2015］を受け継いで、朱印船貿易および日本町に関連する書籍所載の地図のうち、現在のタイ王国の領域内にあった地名の表記について訂正・注釈を加えることを目的とする。具体的には、地名ごとにその表記[1]、地図上での位置、歴史的な位置づけとそれらの史料的根拠などについて検討する。

検討の対象とするのは図１から図12の地図である[2]。通し番号を打ってあるが、以下では読者の便宜を考えて、岩生図1934、木村図2014というように表記する。一瞥してわかるように、８点が岩生成一氏の手になる地図である。あらためて氏が朱印船および日本町（日本人町）の研究にいかに力を尽くしてきたがわかる。朱印船貿易と日本町についてまず参照すべきは氏の研究であることは間違いなかろう。少なくともタイ部分における事実の確定という点では、岩生氏の実証研究によるところがほとんどと思われる。

したがって以下の考察にあたっては、先行研究、とりわけ岩生氏の『南洋日本町の研究』『新版　朱印船貿易史の研究』『続南洋日本町の研究』から種々の地図表記の根拠と考えられる記述を探し、検討を加えることが基本的な作業となる。

さらに必要に応じて史料にまで遡ることになる。残念ながらタイ語の同時代史料は、1767年におけるアユタヤ王国の滅亡とともにほぼすべて失われたため、検討のしようがない。1795年以後に編纂された『アユタヤ王朝年代記』詳述本の諸本には日本人に関する記述があるにはあるが[3]、零細な言及が数箇所あるにすぎない。唯一のまとまった記事（と言っても大した長さではないが）も、後代の史料であり、かつ同時代のヨーロッパ史料と噛み合わず、信憑性が乏しい[4]。したがって、参照することになるのは主に日本とヨーロッパの史料である。ただしあくまで筆者の能力の範囲内のことであり、筆者が見落とした史料や、アクセスできない史料に重要な記述がある可能性は免れない。

Ⅰ　アユチヤ／アユチャ／アユチア／アユタヤ／暹羅／Ayuthia

アユタヤは朱印船の主要な渡航先であった。1604年から1635年のあいだに発給された356通の朱印状のうち、暹羅を宛先とするものは56通にのぼる。この数は最も多い交趾の71通に

次ぐ［岩生1985：127. ただし171頁では353通のうち55通］。同地に日本町があったことも有名である。日本町はアユタヤの城外南方、チャオプラヤー川の東岸に位置し、対岸にはポルトガル人居住区が、北にはオランダ東インド会社の商館があった（図13）。岩生氏によれば、日本町は1615年にはすでに存在し、最盛期には1000人から1500人の人口を擁したという。1630年、プラサートトーン王が日本町の長であった山田長政を死に追いやるとともに、日本町を焼き討ちした。しかし町はその後再建され、少なくとも1680年代まで存続していたらしい［岩生1966a：127－211］。日本人の傭兵部隊は「日本人義勇組」としてアユタヤの官制に組み込まれていた［石井、吉川1987：56－60］。アユタヤにおける朱印船貿易と日本町の実態については永積氏がさらに研究を進めている［永積2001］。

関連諸地図においても、アユタヤは朱印船の渡航先および（または）日本町所在地（岩生図1934、木村図2014では「日本人町」）とされている。このこと自体については特に付け加えることはない。以下では地図上におけるその位置と地名表記について若干の補足をしておきたい。

まずアユタヤの位置について。シャム湾からチャオプラヤー川（メナム川）を遡ることおよそ140km[5]、チャオプラヤー川とロッブリー川、パーサック川との合流地点に1351年に築かれたのがアユタヤである。したがって永積図2001のようにアユタヤを河川から離して表記するのは問題である。また岩生図1985aではMenam R.にAyuthiaが位置しておらず、他の河川（ロッブリー川か）に接しており、その川がAyuthiaの南でMenam R.と合流している。これも誤り。

次に地名についてである。アユタヤとは首都の名であり、同時に国名であった[6]。17－18世紀におけるその正式名称は、アユタヤ時代の法令を収録した『三印法典』（1805年成立）を見るに、以下の通りであったようである。

กรุงเทพมหานคร บวรทวารวดี ศรีอยุธยา มหาดิลกพภ นพรัตนราชธานี บุรีรมย์

Krungthēp Phramahānakhǭn Bǭwǭnthawārawadī Sī ‘Ayutthayā Mahādilokphop Noppharattanarātchathānī Burīrom

クルンテープ・マハーナコーン・ボーウォーンタワーラワディー・シーアユタヤー・マハーディロックポップ・ノッパラタナラーチャターニー・ブリーロム[7]

試みに訳すならば、「神の都、偉大なる首都、栄光ある門があるもの、吉祥なる不敗［の都］、偉大にして至上の世界、九種の宝玉のある王都であり、楽しい城市」ほどの意味である。アユタヤ自体は「不敗」を意味する。同時代の西洋諸語ではOdiaやJudiaなどと綴られた［Pires 1944：vol.1, 104；ピレス1966：212；Vliet 2005（1692）：104；フリート1988（1692）：97］。「シーアユタヤー」の訛音であるSijoutihaという表記も見られる［Gervaise 1989（1688）：37］。

岩生氏による地図では1985年まで「アユチア」「アユチヤ」「アユチャ」「Ayuthia」という表記が用いられている。これは西洋人による古い研究の表記に由来しているものと思われる。たとえばWood［1924］ではAyut'iaと綴られている[8]。一方で、朝尾図1986・岩生図1987

以降の地図ではすべて「アユタヤ」となっている。1960年代末から、日本におけるタイ史研究においてこの表記が一般的なものになったためであろう。近年のタイ（史）研究では、より原音に近い「アユタヤー」や「アユッタヤー」というカナ表記も使われている。ただし本稿では一部を除いて「アユタヤ」を用いることにしている。

漢字文化圏においてこのアユタヤは「暹羅」（または暹邏）と呼ばれた。その由来は以下の通り。『島夷誌略』に「至正己丑（1349年）夏五月、［暹は］羅斛に降る」とあり、また『明史』巻324、外国伝、暹羅に「其の後、羅斛強く、暹地を並有し、遂に暹羅斛国と称す」とあるように、羅斛が暹を併合して暹羅斛国となった。羅斛はロッブリーを指す。暹がどこの勢力に当たるのかは諸説あるが、今は立ち入らない。『明史』巻324によれば、洪武10年（1377）に冊封を受け、暹羅国王印を下賜されると、その国は初めて暹羅と称したという[9]。

このように暹羅とは国名であるが、『通航一覧』巻265（刊本第６、492頁）に「王城はメナム河中の大洲にあり、其名もまた暹羅といふ」とあるように、日本人は首都の名としても認識していた。

岩生図1966b、朝尾図1986には暹羅に「シャム」というルビが振られているが、これには注意が必要である。江戸時代初期、日本人は「暹羅」をもっぱら「シャムロ」または「シャムロウ」と読んでいたためである［岩生1985：156；石井、吉川1987：iii－iv］。たとえば、金地院崇伝の手になる「異国近年御書草案」に収録されている、慶長11年（1607）に徳川家康が暹羅国王に宛てた国書の表題は「暹邏（シャムロ）國御書」とある［異国日記刊行会編1989：186］。また1712年に出版された『和漢三才図会』巻第14、外夷人物では暹羅に「しやむろ」「スエンロウ」と仮名が振られている。カタカナの方は外国音である［寺島編1884：巻之上, 695］。

しかし1708年に上梓された西川如見『増補華夷通商考』巻３には「暹羅（シャム）シャムロウ」とあり、また1715年頃に成立した新井白石『西洋紀聞』中巻には「スイヤム、【シャム、またはシャムローともいふ、漢に暹羅と訳す、これ也】」「スイヤム、またはシャムともいふは、すなはち暹の番音也」（【　】は割注）とあって、「ロ」「ロウ」が落ちて「シャム」になりつつあるのがわかる。『通航一覧』巻265（刊本第６、491頁）に「其稱呼、采覽異言にはスイヤム、印度志、異國和解等にはシャムとあれとも、異國日記、異國渡海御朱印帳及ひ長崎志、舜水朱氏談綺等、シャムロと旁訓せるもの多きにより、これに從ふ」とある。わざわざこのように記すということは、19世紀半ばまでにはシャムのほうが一般的になっていたのだろう。

「暹」およびヨーロッパ諸語におけるSiamに対応するタイ語は「サヤーム（สยาม Sayām）である[10]。ただしアユタヤの人々にとって「暹羅」の２文字が「サヤーム」を指していたわけではなかったようである。『暹羅館訳語』乙種本（東洋文庫所蔵本）の雑字・地理門では、สยุดทยา（文字通りに読めばSayutthayāであるが、สีอยุดทยา Sī ‘Ayutthayāの誤写であろう）に「暹羅」という意味と「洗欲駝雅」という音（「シーアユタヤー」の音写）が付されている。つまり暹羅とはアユタヤであった。これはアユタヤ時代以後も同様であった。のちに都とな

るトンブリーやバンコクもその正式名称にアユタヤを含んでいる。18世紀末から19世紀前半、バンコク宮廷は清朝の勅諭や阮朝ベトナムからの国書にある暹羅をもっぱら「クルン・プラマハーナコーン・シーアユタヤー」と訳していた［川口2019：118－121，129－131］。

Ⅱ　バンコク／バンコック／Bang-kok

地図上においてバンコクないしバンコック（Bangkok）は、日本船貿易港または寄港地（岩生図1934、岩生図1941、岩生図1962）として、あるいは朱印船渡航地または寄港地（岩生図1985a、朝尾図1986）として表記されることが多い。朱印船の航路（岩生図1962）または日本船の航路（岩生図1966b）が引かれているものもある。そのほか地名のみ表記されている地図もある（岩生図1985b）。一方で、バンコクは岩生図1987、永積図2001、荒野図2003、木村図2014には見られない。

17世紀のバンコクとは、アユタヤ宮廷がトンブリーと呼んだ町であり、チャオプラヤー川の西岸に位置していた（図14）[11]。河口から川を遡ること約50kmの地点に位置し、さらに約90km遡ればアユタヤに至る。17世紀末、トンブリーの対岸には砦があった。1782年にラーマ１世によって東岸に首都が築かれ、今日のバンコクへと発展していく。

したがって細かいことを言えば、多くの朱印船関連地図においてバンコクはチャオプラヤー川東岸に記されているが、西岸に記すのが正しい。

朱印船貿易におけるバンコクの位置づけについて、岩生［1985：351］に、1616年に三浦按針の朱印船は「バンケ（Banke）すなわちバンコクに達し、…知事のもとに赴いて小舟を借り受け、献上品を積んで国都アユチヤへ遡行して国王に謁することを要請し、十四日になって遡行許可のパスを得」とある。したがってバンコクはアユタヤ行きの朱印船の寄港地であったと言えよう。

Ⅲ　バン・チャウピヤ（バーン・チャオプラヤー）

バン・チャウピヤを記載している地図はないが、朱印船と関係のある地名なので触れておきたい。岩生［1985：86－87］は以下のように『天竺徳兵衛物語』（『通航一覧』巻267所載）を引用している（返り点は省略した）。

一　シャム国流砂川の川口より三百里川上にてハンテヒヤと申城有之、此所にて日本朱印改候て、マカダ国の王へ早船にて申上候。

一　天竺にて山田仁左衛門と申人有之、是ハシャム一国の王なり。日本よりの御朱印を此仁左衛門改申候よし。

岩生氏は『別本天竺徳兵衛物語』にも「波牟天亜」において日本船の極印を改めるという記事があることを指摘したうえで、「メナム河の河口東岸のバン・チャウピヤ（Ban-

Chiauphia)」において、官憲が朱印状を検査して王廷に報告し、返事を待ってから遡行の諾否を決したこと、山田長政が一時その任にあったことを述べている。

ただし『通航一覧』巻267（刊本第 6 、523頁）を見るに、上記引用の「三百里」は「三里」の誤り。「三百里」に作るのは同所載『別本天竺徳兵衛物語』である。

ところが一方で岩生氏は、「メナム河口から遡ってバンコクに近いバン・チャウピヤ（Ban-Chiauphia)」とも述べており［岩生1985：353］、この町が河口とバンコクのいずれに近いのか混乱している。

これについて、ファン・フリートの日記に「河口にあるBantiauphia」とある［Vliet 2005（1647）：71］。ただし後述するように、そのタイ文字・ローマ字表記を「Ban Chaophraya（บ้านเจ้าพระยา)」とするクラーンの注釈は誤りを含む。ケンペル『日本史』所載の地図にも、チャオプラヤー川河口近くの東岸にBantiauphiaという地名を載せている（図15）[12]。

タイ語史料では、1752年にスリランカに渡った高僧ウバーリーがその旅程を、アユタヤ→ノンタブリー→トンブリー→オランダ人の倉庫→プラプラデーン→パークナーム・バーン・チャオパヤー（ปากน้ำบางเจ้าพญา Pāknam Bāng Čhaophayā）の順に記している[13]。パークナーム・バーン・チャオパヤーの「パークナーム」は河口を意味する。同地が河口に近いのは、プラプラデーンよりも川を下ったところにあることからも明らかである。「チャオパヤー」は「チャオプラヤー（เจ้าพระยา čhaophrayā)」と同じである。

以上から、ここで朱印状を改めたというハンテヒヤは、チャオプラヤー川（メナム川）河口近くの東岸にあったバーン・チャオプラヤー（บางเจ้าพระยา Bāng Čhaophrayā[14]）に当たることがわかる。

Ⅳ　バンプトソイ

このバンプトソイが本稿における最大の問題であろう。バンプトソイは岩生図1985bに初めて現れ、タイ湾東北岸、バーンパコン川の河口付近（チャチューンサオ県）にあったとされる。朱印船航路はこの町から引かれている。これは朝尾図1986にも継承され、バンプトソイが朱印船寄航地とされ、朱印船航路がそこに引かれている。永積図2001と荒野図2003では、バンプトソイという地名こそないが、航路がチャオプラヤー河口ではなくタイ湾東北岸に伸びている。一方、木村図2014にバンプトソイはなく、航路もチャオプラヤー川を遡行してアユタヤまで引かれている。

このように岩生［1985］以来、寄航地と見なされてきたバンプトソイであるが、その本文を確認すると、種々の疑問を感じざるをえない。岩生［1985：190］は以下のように暹羅から日本への朱印船航路を説明している（下線と①②は引用者による）。

①次に暹羅から日本に還る航路は、メナム（Menam）河口から一時西航してペンテ（Pendam）を過ぎ、次いで東転してバンコセイヤ（Banptosoi）の沖から南東に向かい、②クイすなわ

ちケンペル（E. Kaempfer）の航海記にクイ山（Mt. Kui）と書いてあるクイ岬(21)を東に望んで南下し、プル・パンチャン（Pulo Panjan Borso, Bartadeir）の近くを通り、さらに南下して柬埔寨最南端の岬沖のプロ・ウビ（Pulo Ubi）に達している。

この引用部分には問題が多い。まず「バンコセイヤ」にBanptosoiというローマ字表記が付されている。「バンプトソイ」のほうがローマ字表記に近いように思われるが、何を根拠として「バンコセイヤ」と読んでいるのかわからない[15]。件名索引［岩生1985：*20*］では、「Banotosoi（バンセコイア）」となっており、ローマ字表記とカナがさらに異なる。

第二に、上記引用を読んでも、船はこのBanptosoiの沖を通過するにすぎず、これを朱印船の寄航地とは見なすことはできない。前述の通り、チャオプラヤー河口から航路を引くべきである。

第三に、史料的根拠がはっきりしない。下線部②については、原注（21）にあるように、ケンペルの『日本史』である[16]。しかしそこに下線部①に相当する記述はない。タシャール『シャム旅行記』（1689年）に下線部①に近い記事があるが、Banptosoiは言及されていない[17]。ほかに典拠があるのかもしれないが、筆者は見つけられなかった。

一体、このバンプトソイとは何なのであろうか。今のところ筆者はこれに対応するタイ語の地名を見つけられていない。暫定的な見解は、バンプトソイは「バーン・プラーソーイ（บางปลาสร้อย Bāng Plāsǭi）」の誤読というものである。バーン・プラーソーイはチョンブリーの古い俗名であり［Terwiel 1989：177］、その位置は岩生図1985bのバンプトソイよりも南、タイ湾東岸である。

ラ・ルーベール『シャム王国』（1693年）所載の地図に“Banplasoi”とあり、位置もバンプトソイに近似している（図16）。これではないかもしれないが、岩生氏はいずれかの史料のBanplasoiをBanptosoiと見間違えたのではあるまいか。すでにトメ・ピレス『東方諸国記』（1515年頃）に「シアンの国の領主たちの港」のひとつとしてパンゴライ（Pamgoray）が挙げられており、バーン・プラーソーイに比定されている［Pires 1944：vol. 1, 105；ピレス 1966：215－216］。有力な港ではあったのであろうが、朱印船の地図に載せる必要はない。

Ⅴ　ペチャブリ／ペチャプリ／ベチャブリ

ペチャブリー（เพชรบุรี Phetchaburī）は岩生図1941に「ペチャブリ」という表記で「日本人之雑居地」として現れる。しかし岩生図1962に「日本人在住地」として表記したのち、岩生氏はこの町を地図に記載しなくなる。一方で朝尾図1986には「ペチャプリ」が「日本人在住地」として、荒野図2003にも「ペチャプリ」が「日本人在住地」として表記されている。木村図2014には「ベチャブリ」がやはり「日本人在住地」として示されている。

これらの地名表記のうち、「ペチャブリ」は許容範囲内であるが、「ペチャプリ」と「ベチャブリ」は問題である。タイ語のphとbの音はパ行、バ行で書き分けられるからである。カナ

表記としては「ペチャブリー」か「ペッチャブリー」が望ましかろう。なお現在でも口語においてPhetchaburīのchaは発音されず、Phetburīと呼ばれることが多い。当時もそうであったらしく、ファン・フリートはPypryとPitsjebouryという２つの町があるかのように記述している［Vliet 2005（1692）：152；フリート1988（1692）：170］。ラ・ルーベールはPipeliと地図に記している（図16）。

上記のように、この町は「日本人在住地」とされてきたが、その根拠ははっきりしない。唯一、『南洋日本町の研究』に以下のような出来事が見える。1610年に即位したソンタム王がある高官を処刑したところ、彼の恩を蒙っていた多数の日本人が王宮に侵入して、日本人に好意のない高官を殺し、首都を略奪したのち、「バンコックの西南、マレイ半島の東北隅ペチャブリ（Phetchaburi）に引揚げて自立を計ったことがある」という[18]。

Ⅵ　リゴール／ナコン／六崑／Nakwan sri Tamarat

リゴールはマレー半島にあるナコーンシータンマラート（นครศรีธรรมราช Nakhǭn Sī Thammarāt）に当たる。リゴールという地名の由来については、チャイヤー刻文（1230年）に見えるターンブラリンガの領主の尊号シュリー・ダルマラージャが、のちにナガラ・シュリー・ダルマラージャ（吉祥なる正法王の都）という地名に転化したとされている。タイ語ではナコーンシータンマラート（ナコンやシータムマラートとも表記される）である。一方で、「ナガラ」が訛ってリゴール（Ligor）とも呼ばれるようになった［深見1989：87］。西川如見『華夷通商考』巻３では「六甲（ロッコン）」「六崑」、『通航一覧』巻265（刊本第６、493頁）では「ロッコン」「ハリコゴル」という発音と「六昆」「六坤」「六甲」という表記を挙げている。

朱印船関連の地図の多くにおいて、「リゴール」は「日本人居住地」「日本人在住地」「日本人之雑居地」として記されている（岩生図1934、岩生図1941（ナコン（リゴール））、岩生図1962、岩生図1966b（六崑（リゴール））、朝尾図1986、荒尾図2003、木村図2014）。岩生図1987ではナコーンシータンマラートの位置に「太泥」が「日本人在住地」として記されているが、誤記であろう。

地図上の位置について言えば、朝尾図1986のリゴールは本来の位置より北、現在のスラータニー県に記されており、誤り。この誤記は荒尾図2003、木村図2014に継承されている。また、岩生図1985aでは、「東京」や「暹羅」などと同じく赤字でマレー半島北部に「六崑」と記されている。朝尾図1986でも地域名として「六崑（ロッコン）」が見える。ただし「六崑」が都市のみならず、マレー半島北部を広く指していた根拠は不明である。

岩生図1966bは六崑（リゴール）を朱印状の宛先の地名とし、岩生図1985aはNakwan sri Tamaratを「朱印船渡航地」とする。岩生図1987では前述のように「太泥」と誤記されているが、「日本船貿易港」とされ、「日本船直通航路」が南シナ海からそこに伸びている。朝尾図1986でも「朱印船の主要航路」がリゴールに至る。しかし岩生氏自身が一覧表にまとめているように、リ

ゴールを渡航先とする朱印状は１通も発給されていない［岩生1985：127］。

とはいえ日本人商人がこの地に渡らなかったわけではない。岩生氏は文禄の初めに日本から「六昆」などに渡海した商船があったという史料を紹介している［岩生1985：49］。また『通航一覧』巻267（刊本第６、528－529頁）は、『長崎夜話草』に見える、寛文のころに日本人が暹羅から琵牛（ペグー）の伽藍に参詣しに行った逸話を引きつつ、「暹羅渡海のものゝうち、六昆國にも赴きて商賣せしもの、【渡海の證は、首卷渡海御朱印の條にあり、されとも、此國渡海の御朱印は絶て所見なし、おもふに、こは暹羅域中の小邦なれは、暹羅の御朱印拜賜のもの、往て通販せしなるへし、此國仕出しの船本邦に來らす、（後略）】及ひ隣國琵牛に到りて、其寺塔伽藍を見たるもの數人あり」（【　】は割注）と記す。暹羅行きの朱印状を受け取ったもののなかにはさらに六昆にも商売のために赴いたものがいたという。そのほか、1641年にはアユタヤの木村半左衛門が錫の買い入れのため六崑に船を派遣し、1661年には日本人が同地において錫を買い占めている［岩生1966a：206］。

このようにリゴールが日本人商人と縁の深い地であったことは確かであるが、これらのことをもって日本人の居住地であったと言うには苦しい。居住地と言える証拠としては、1629年に山田長政が日本人300人を率いてこの地に赴任してきたこと［岩生1966a：170－173］ぐらいしか、筆者には見つけられなかった。

Ⅶ　シンゴラ／サンゴラ／Singora

シンゴラはマレー語のSingoraにあたり、ナコーンシータンマラートの南にある港町である。西洋語史料に見えるSangora［Vliet 2005（1692）：109；フリート1988（1692）：104］はSingoraに由来する。タイ語ではソンクラー（สงขลา Songkhlā）である。シンゴラの位置づけを一覧にすると下記の通り。

岩生図1934	シンゴラ　日本船貿易港
岩生図1941	シンゴラ　日本人之雑居地　日本船寄港地
岩生図1962	シンゴラ　日本人在住地　日本船貿易港　朱印船直通航路あり
岩生図1966a	シンゴラ　主要都市
岩生図1966b	なし
岩生図1985a	Singora　（地名のみ）
岩生図1985b	なし
朝尾図1986	シンゴラ　日本人在住地　朱印船の主要航路あり
岩生図1987	サンゴラ　日本人在住地　日本船貿易港　日本船直通航路、日本船非直通航路あり
永積図2001	なし
荒野図2003	シンゴラ　日本人在住地

木村図2014　　シンゴラ　日本人在住地

このように地図によってかなり異なっているが、時代が下るにつれて「日本人在住地」に落ち着いてきている。

地理的な位置について、岩生図1987のサンゴラはパタニ（太泥）の誤りであり、太泥とサンゴラのあいだの航路が集まっている、地名のない場所が実際のサンゴラに相当すると思われる。また上記のとおり、しばしば朱印船の航路がシンゴラに引かれているが、シンゴラを渡航先とする朱印状は発給されていない［岩生1985：127］。そもそも先行研究は日本人と同地との貿易にほとんど言及していない。

岩生図1941から木村図2014までシンゴラを日本人居住地としてきた。しかし岩生氏の『南洋日本町の研究』にその根拠は挙げられていない。唯一、1629年にリゴールに赴任した山田長政がサンゴラを占領したという記事が見えるのみである［岩生1966a：170－173］。

岩生氏の研究から、ペチャブリー、リゴールとともにシンゴラは日本人居住地というよりも、日本人と何かしら縁のあった地であったという印象を受ける。

Ⅷ　パタニ／太泥／Patani

17世紀初頭、パタニ（Patani）は女王の統治するマレー人の国であり、シャムに服属していた。「太泥」という漢字表記が岩生図1962、岩生図1966b、岩生図1985aに見られるが、朱印状における表記は「大泥」である［岩生1985:71］。タイ語ではパーニーあるいはパッターニー（ปัตตานี Pattānī）という。

多くの地図でパタニは朱印船の渡航先とされてきた（岩生図1934（日本船貿易港）、岩生図1941（日本船寄港地）、岩生図1962、岩生図1966b、岩生図1985ab、朝尾図1986、岩生図1987[19]、永積図2001、荒野図2003、木村図2014）。もちろんこれは正しい。大泥を渡航先とする朱印状は７通確認されている［岩生1985：127］。

また岩生図1934以来、パタニは日本人在住地としても表記されてきた（岩生図1941、岩生図1962、岩生図1966b、朝尾図1986、荒野図2003、木村図2014）。しかし日本人が住んでいた根拠は岩生［1966a］には見いだせない。唯一、岩生［1987：371］の収録する「史料一二　洗礼簿　一二－一『オランダ人洗礼簿』一六一六－一六二〇年抜粋」に「一六一九年　十月　日本のハンニバル。約十八歳。名親は司令官ヘンドリック・ヤンスゾーン、太泥の商館長ヘリッツ・フレデリクスゾーン・ドライフ。十月二十日太泥商館において」とあり、１人の日本人が住んでいたことが知られるのみである。

朱印船の航路について本格的に検討する能力は筆者にないが、永積図2001、荒野図2003と比べると木村図2014ではアユタヤ行きの航路とパタニ行きの航路が分離してしまっている。これではパタニ行きの船は日本から必ず直航したのに対して、アユタヤ行きはすべてベトナム中部の港を経由したことになってしまう。

おわりに

本稿における議論をまとめておこう。今日のタイ王国の版図のなかで、朱印船の渡航先であったのはアユタヤとパタニである。アユタヤ行きの朱印船はバーン・チャオプラヤーやバンコクにおいてアユタヤの官吏によってチェックを受けた。そのためこの２つの町は朱印船の寄港地と言ってもよい。一方で「バンプトソイ」はバーン・プラーソーイの誤読と考えられ、後者も朱印船と関係はないため、地図に記載する必要はない。

日本町（日本人町）と呼ぶにふさわしい、日本人の集住する地があったのはアユタヤのみである。ペチャブリー、リゴール、パタニに日本人が住んでいたと言えないこともないが、いまのところ根拠となる史料は乏しい。シンゴラにおける日本人居住は確認されていない。もちろん史料がないとはいえ、当時の日本人の広がりを考慮すれば[20]、日本人がこれらの町に住んでいたとしても不思議はない。ただしそれは他の町にも言えることである。これらの町のみをあえて日本人居住地として地図に記すならば、相応の理由が必要であろう。岩生氏の研究からは、ペチャブリー、リゴール、シンゴラは日本人と何かしら縁のあった町であったという印象を受ける。

以上のように本稿は朱印船関連地図のタイに関する部分について訂正と補足を試みてきたが、もとよりその目的は先行研究の瑕疵をことさらに指摘することではない。また筆者はポルトガル語やスペイン語、オランダ語の史料や研究を扱うことはできないため、本稿にも誤りがあるかもしれない。諸賢のご批正を乞う次第である。

翻って地図に戻ると、地図上に朱印船渡航先や日本町を正確にプロットすることの重要性は論を俟たないが、それに留まらず、日本一国史あるいはナショナル・ヒストリーを越えた意義を地図に持たせるにはどうすればよいのだろうか。永積氏は「朱印船貿易、あるいは日本町を17世紀初期のアジア全体を展望して描き直せば、その役割、全体像がより鮮明に見えてくるだろう」と指摘している［永積1989：128］。そのためには地図はいかにあるべきなのだろうか。あるいは「日本史と東洋史（東南アジア各国史のみならず、中国史の知識も必要である）、西洋史（東西交渉史）の重なり合うエキサイティングな領域」である南洋日本町や朱印船貿易の研究［蓮田2015：34］においてどのような地図が提示されるべきなのか。重なり合う歴史を地図上で表現するのにはどうすればよいのか、さらに踏み込んだ議論が必要であるように思われる。

史料・参考文献

【和文・漢文】

朝日新聞社編1986『週刊朝日百科日本の歴史31 中世から近世へ―⑨出島と唐人町』朝日新聞社。

新井白石1882『西洋紀聞』上中下、白石社。

荒野泰典2003「江戸幕府と東アジア」同編『日本の時代史14　江戸幕府と東アジア』吉川弘文館、7 －181頁。

異国日記刊行会編1989『影印本異国日記―金地院崇伝外交文書集成―』東京美術。
石井米雄1999『タイ近世史研究序説』岩波書店。
石井米雄2002「古代ジャワ語文献に見える『シャム』―タイ史の新しい見方についての試論―」『東南アジア　歴史と文化』31、113－118頁。
石井米雄、吉川利治1987『日・タイ交流六〇〇年史』講談社。
岩生成一1934『近世初期の対外関係』（岩波講座日本歴史）岩波書店。
岩生成一1941『近世に於ける日本人の南洋発展』啓明会事務所。
岩生成一1962『朱印船と日本町』至文堂。
岩生成一1966a『南洋日本町の研究』岩波書店。
岩生成一1966b『鎖国』中央公論社。
岩生成一1985『新版　朱印船貿易史の研究』吉川弘文館。
岩生成一1987『続南洋日本町の研究―南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動』岩波書店。
川口洋史2019「一八世紀末から一九世紀前半における「プララーチャサーン」―ラタナコーシン朝シャムが清朝および阮朝ベトナムと交わした文書―」松方冬子編『国書がむすぶ外交』東京大学出版会、111－143頁。
木村直樹2014「近世の対外関係」『岩波講座日本歴史11近世２』岩波書店、107－139。
ショワジ、タシャール1991（1687，1689）『シャム旅行記』（鈴木康司、二宮フサ訳）17・18世紀大旅行記叢書７、岩波書店。
『暹羅館訳語』東洋文庫所蔵本。
ソウザ、ルシオ・デ、岡美穂子2017『大航海時代の日本人奴隷』中央公論新社。
寺島良安編1884－1888（1712）『和漢三才図会』上中下、中近堂。
冨田竹二郎編1997『タイ日大辞典』めこん。
永積洋子1989「書評・紹介　岩生成一著『続南洋日本町の研究―南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動』」『東南アジア　歴史と文化』１、125－128頁。
永積洋子2001『朱印船』吉川弘文館。
西川如見1899（1708）『増補華夷通商考』西川忠亮編・発行。
日本タイ学会編2009『タイ事典』めこん。
蓮田隆志2015「朱印船貿易・日本町関連書籍所載地図ベトナム部分の表記について」『資料学研究』12巻、33－53頁。
林復斎編1912－14『通航一覧』８集、国書刊行会。
ピレス、トメ1966『東方諸国記』（生田滋、池上岑夫、加藤栄一、長岡新治郎訳注）大航海時代叢書５、岩波書店。
深見純生1989「単馬令に関するノート―13世紀マレー半島中部の発展―」『東南アジア　歴史と文化』18、86－98頁。
深見純生2013「タイ湾における暹の登場と発展」『南方文化』第40輯、71－91頁。
藤原利一郎1986『東南アジア史の研究』法蔵館。
フリート、イレミアス・ファン1988（1692）「シアム王国記」生田滋訳・注、『オランダ東インド会社と東南アジア』（生田滋訳注）大航海時代叢書第Ⅱ期11、岩波書店、95－214頁。
【タイ語】
Damrongrāchānuphāp, Somdet Kromphrayā（ed.）. 2003（1916）. *Rūang praditsadān phrasong sayāmwong nai Langkāthawīp*（ランカー島におけるシャム派僧団の設立）. Bangkok: Matichon.

Ishii Yoneo, Shibayama Mamoru, and Aroonrut Wichienkeeo（eds.）. 2008. *Datchanī khonkham nai kotmāi trā sām dūang*（『三印法典』語彙索引）. Kyoto: Kyoto Universitty.

Phongsāwadān Krung Sī 'Ayutthayā chabap Phan Čhanthanumāt（*Čhēm*）（パン・チャンタヌマート（チューム）本アユタヤ王朝年代記）. 1936. *Prachum phongsāwadān*, phāk thī 64.

【欧文】

Baker, Chris, Dhiravat Na Pombejra, Kraan, Alfons Van Der, and Wyatt David K（eds.）. 2005. *Van Vliet's Siam*. Chiang Mai: Silkworm Books.

Coronelli, Vincenz. M. 1687. *Royaume de Siam avec les royaumes qui luy sont tributaires et les isles de Sumatra, Andemaon, etc*. Paris: Jean Baptiste Nolin.

Cushman, Richard D（tr.）, and Wyatt, David K（ed.）. 2000. *The Royal Chronicles of Ayutthaya*. Bangkok: The Siam Society.

Floris, Peter. 1934. *Peter Floris, his Voyage to the East Indies in the Globe, 1611–1615: The Contemporary Translation of his Journal*. Ed. by W.H. Moreland. London: The Hakluyt Society.

Gervaise, Nicolas. 1989（1688）. *The Natural and Political History of the Kingdom of Siam*. Tr. by John Villiers. Bangkok: White Lotus.

Ginsburg, Henry. 2000. *Thai Art and Culture: Historic Manuscripts from Western Collections*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Kaempfer, Engelbert. 1906（1727）. *The History of Japan: Together with a Description of the Kingdom of Siam, 1690－92*, 3 vols. Tr. by J.G. Scheuchzer. Glasgow: J. MacLehose.

La Loubère, Simon de. 1986（1693）. *The Kingdom of Siam*. Singapore, Oxford, New York: Oxford University Press.

Pires, Thomé. 1944. *The Suma Oriental of Tomé Pires: An Account of the East, from the Red Sea to Japan, Written in Malacca and India in 1512－1515; and, The book of Francisco Rodrigues: Rutter of a Voyage in the Red Sea, Nautical Rules, Almanack and Maps Written and Drawn in the East before 1515*, 2 vols. Tr. by Armando Cortesão. London: The Halkuyt Society.

Records of the Relations between Siam and Foreign Countries in the 17th Century: Copied from Papers Preserved at the India Office, vol. 1. 1915. Bangkok: Vajirañāṇa National Library.

Terwiel, B. J. 1989. *Through Travellers' Eyes: An Approach to Early Nineteenth-Century Thai History*. Bangkok: Editions Duang Kamol.

Vliet, Jeremias van. 2005（1647）. "Diary of the Picnic Incident（1636－37）." Tr. and ed. by Alfons van der Kraan. In Baker et al.（eds.）2005, pp. 35－88.

Vliet, Jeremias van. 2005（1692）. "Description of the Kingdom of Siam（1638）." Tr. by L. F. Ravenswaay, ed. by Chris Baker. In Baker et al.（eds.）2005, pp. 89－178.

Wyatt, David K. 1982. *Thailand: A Short History*. New Heven and London: Yale University Press.（First Edition）

Wyatt, David K. 2003. *Thailand: A Short History*. New Heven and London: Yale University Press.（Secound Edition）

Wood, W. A. R. 1924. *A History of Siam, from the Earliest Times to the Year A.D. 1781: With a Supplement Dealing with More Recent Events*. Bangkok: Chalermnit Bookshop.

［附記］本稿は2018年度東アジア文化研究交流基金若手研究者研究助成による研究成果の一部である。

注

1　朱印船などに関する日本語書籍におけるタイ語のカナ表記は、必ずしもタイ語から直接起こしたものではなく、遡れば西洋諸語の研究におけるローマ字表記に由来するところが大きいものと思われる。時期や研究者によってローマ字表記の仕方は異なるが、大雑把に言えばタイ王国学士院（Royal Institute of Thailand）が策定した転写方式、あるいはそれに近いものがよく用いられてきたように思われる。何度か改定されているが、1968年以後におけるその転写方式の特徴は、異なる母音を同じローマ字で表記するものがある、短母音と長母音を区別しない、無気音と有気音の表記を区別しないものがある、などである。日本語書籍におけるタイ語のカナ表記やローマ字表記もこれらの影響を受けているところがある。1999年に改定された学士院の転写方式はhttp://www.royin.go.th/wp-content/uploads/2015/03/416_2157.pdf（2019年１月３日最終閲覧）を参照。なお本稿におけるタイ語のローマ字表記はアメリカ図書館協会およびアメリカ議会図書館（ALA-LC）方式を用いている。

これらの転写方式は基本的に発音に準拠しているが、タイ人が固有名詞、特に自身の姓名をローマ字で記す場合、タイ語の発音ではく、その文字に対応するサンスクリット・パーリ語の音で表記することがある（たとえばพはタイ語ではphだが、サンスクリット・パーリ語ではb）。またタイ文字の綴にはあるが発音しない文字もローマ字表記に入れ込み、一方で綴にはないが、実際にはaと発音するところをローマ字では表記しないことがある。これらの結果、ローマ字表記と実際の発音が乖離してしまうことがままある。本稿で扱う地名の表記にはあまり見られないが、それでもアユタヤをAyudhyaと表記するところに現れている（注８参照）。

2　これらの地図の存在とその書誌情報については蓮田隆志氏のご教示による。記して感謝します。

3　1680年に成立した略述本（ルアン・プラスート本）に日本人に関する記事はない。『アユタヤ王朝年代記』諸本については石井［1999：273－281］を参照されたい。

4　その記事とはソンタム王時代に起きた日本人の反乱についてである。他地域の歴史研究者にとって何かしらの役に立つかもしれないので、『パン・チャンタヌマート本アユタヤ王朝年代記』(1795年成立）小暦964年条（1612/3年）［“Phongsāwadān Krung Sī ‘Ayutthayā chabap Phan Čhanthanumāt（Čhœ̄m）.” 1936：293］から該当部分を試訳しておく。

> そのとき日本人が多くの船で商売をしに入って来ていた。日本人は「大臣は公正ではない。プラ・ピモン（のちのソンタム王―引用者注）と計って大王（先代シーサオワパーク王―引用者注）を殺した」と怒った。日本人は集まって500人あまりとなって、王宮広場に入り、チョームトーンサームラン宮殿において僧侶が書物を講釈するのを聴きにおいでになる国王を捕らえるべく待機した。そのとき丁度プラドゥーローンタム寺の僧侶８名が付き添って、王が日本人の前においでになった。僧侶が付き添って［王が］行ってしまわれると、日本人は「王を捕らえるつもりであったのに、なぜ黙して動かなかったのか」と叫び、日本人は互いに口論して大騒ぎになった。一方、プラ・マハーアンマート（のちのプラサートトーン王―引用者注）が兵を率いて、日本人を攻撃し、多くの死者を出した。日本人は敗れて王宮から出て、ジャンク船に乗って逃げた。それ以後、日本国のジャンク船が都に商売をしに来ることはなくなった。

1612年に日本人がソンタム王に対して反乱を起こしたのは事実である［*Records of the Relations between Siam and Foreign Countries in the 17th Century ...,* vol. 1. 1915：6］。しかし言うまでもなく、それ以後日本船がアユタヤに来なくなったわけではない。また年代記は、日本人が反乱を企てた理由を、大臣がソンタムとともに兄王シーサオワパークを弑逆したことに帰している。しかし1612年にパタニに来ていたイギリス東インド会社社員Peter Florisの記録［Floris 1934：56；Cf. Wood 1924：160－161］と突き合わせると、そもそもシーサオワパーク王自体が存在しない。エーカートッサロット王が死の床にあったとき、

王位を狙っていたJockcrommewayeなる大貴族（Wood［1924：160］はPhra Nai Waiであるとする）が王を教唆して王の長男（Wood［1924：159］によれば副王Sutat王子。年代記では自殺したとされる）を処刑せしめたという。1610年に王が死去し、その次男がソンタム王として即位すると、Jockcrommewayeを処刑した。しかしJockcrommewayeの配下にいた日本人280人が復讐のために王宮に乱入し、王を捕らえて、主人を死に追いやった４人の貴族の処刑を承認させた。日本人たちは財物を略奪して去ったという。

1795年までに、日本船がアユタヤに来なくなった理由が日本人の反乱と結びつけて記憶されていたこと自体は何かしらの意味を持つのかもしれないが、年代記の記事をそのまま歴史的事実と認めることは至難である。付言すれば、年代記は1630年におけるプラサートトーン王による日本町焼き討ち事件に言及しない。

なお『アユタヤ王朝年代記』には英訳［Cushman（tr.), Wyatt（ed.）2000］があり、上記の記事は208頁に見える。この英訳本は年代記諸本の異同をそのまま訳に反映しているという点で優れたものである。索引もあるので、他の日本人への言及もそこから調べることができるはずである。

5　河口からの直線距離では約90kmである。

6　16世紀後半までは「アヨータヤー」であったという議論がある［石井1999：67－76］。

7　Ishii et al.（eds.）2008. 20－21. 綴は現代のものに改めている。『三印法典』ではอยุธยาをอยุทธยาと綴ることがほとんどである。また用例によって首都名の構成要素に出入りがあり、綴にも異同がある。

8　西洋諸語の研究ではAyudhyaという表記も使われてきた。このdhは、ธに対応するサンスクリット・パーリ語の音dhに由来する。しかし近年この表記に代わってAyutthayaが用いられる傾向にある。たとえばワイヤット氏のタイ通史の初版（1982年）ではAyudhyaと表記されていたが、第二版（2003年）ではAyutthayaに改められている［Wyatt 1982；2003］。

9　初期のアユタヤとそれ以前については藤原［1986：３－43］、石井［1999：48－66；2002］深見［2013］も参照されたい。

10　ヨーロッパ諸語のSiamは、マレー語Siyamから入ってきたポルトガル語Sião、Syãoに由来する（石井米雄「シャム」［日本タイ学会編2009：169－170］）。

11　もともとあったバーン・コーク（บางกอก Bāng Kǭk「アムラタマゴノキの生えていた村」の意［冨田編1997：820］）は現在のバンコクと地続きであったが、16世紀に掘削された短絡運河がチャオプラヤー川の本流となった結果、バーン・コークは現在のように西岸に位置するようになった。トンブリーと名付けられたのはチャクラパット王の治世（1548－69年）であるという（増田えりか「トンブリー」［日本タイ学会編2009：285－286］）。西洋史料に見えるBanke、Bancoc、Bankokなどはこのバーン・コークの訛音である。

12　この地図のオリジナルは大英図書館が所蔵しており、Ginsburg［2000：27］に掲載されている。

13　“Rayathāng Phra ʻUbālī pai Lankāthawīp čhǭ. sǭ. 1114.”［Damrongrāchānuphāp（ed.）2003：237－238］.

14　บาง bāng とบ้าน bānでは末子音と声調を異にする。意味も異なり、前者は川や海に沿った村を指し、後者はそうではない村を指す［冨田編1997：820, 825］。先にクラーンの注釈に誤りがあるとした所以である。

15　ただしCoronelli［1687］の地図にはタイ湾東北岸にBancosoyという地名が見える。またGinsburg［2000：20］所収、大英図書館所蔵の地図“Dutch Navigation Chart for Thailand and Cambodia”にもBancosoijとある。これらも後述するバーン・プラーソーイを指しているものと思われる。

16　Kaempfer 1906（1727), vol. 1：81. “On the 23rd of July, being Sunday, we left the coasts of Siam, and the mountains of Kui, and sail'd over this Gulf, steering South East. On the 26th we saw a long and low Island Pulipanjang, bearing E. N. E. at some few leagues distance, along which we steer'd our course. On the 27th we made the Island Puli ubi, which appear'd to be compos'd of high mountains, and several small Islands.”

17　ショワジ、タシャール1991（1687，1689）：466.「シャムからマカオまでの航程では、最初、砂州から南南西へ約三〇リュー離れた、幾つかの山々の近くまで行きます。ポルトガル人はこれらの山を「ペンテス」と呼んでおりますが、フランス語で「櫛」の意味です。その理由はよく判りませんが、恐らく、山々の頂きが櫛の歯のようにぎっしりと一直線に並んで見えるからでありましょう。その辺で向きを南東に、次に東に変え、カンボジア王国の島々ポル・ユビ島及びポル・コンドル島に至ります。」

18　岩生1966a：129－139. 日本人がペチャブリーに引き上げた史料的根拠として*Records of the Relations between Siam and Foreign Countries in the 17th Century ...*, vol. 1.［1915：６－８］が挙げられている。この日本人の反乱については本稿注４も参照。

19　前述の通り、岩生図1987では太泥をサンゴラと誤記している。

20　たとえば16世紀末から17世紀初頭、日本人奴隷はマカオからフィリピン、ゴア、中南米、イベリア半島にまで分布していた［ソウザ、岡2017］。

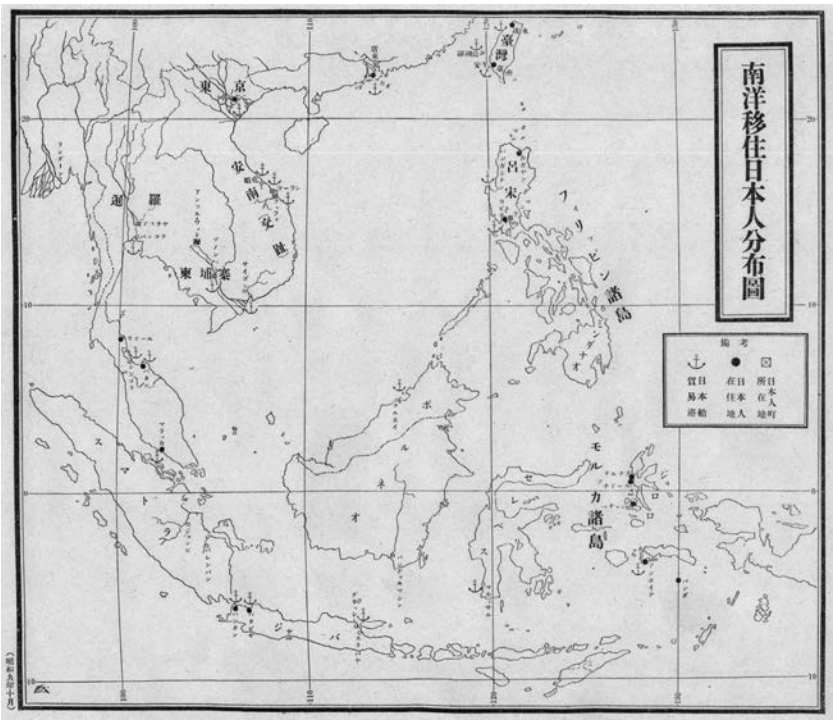


図１　岩生図1934　出典：岩生1934

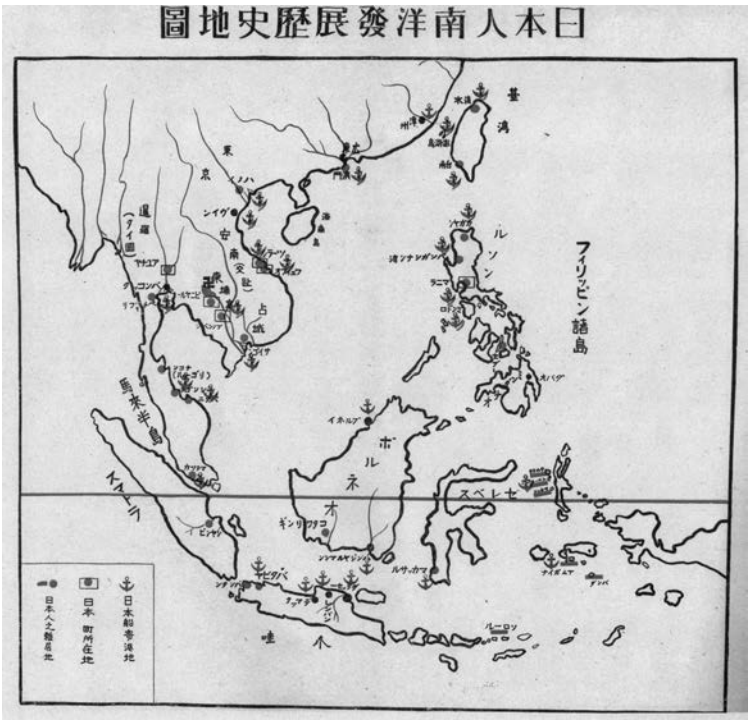
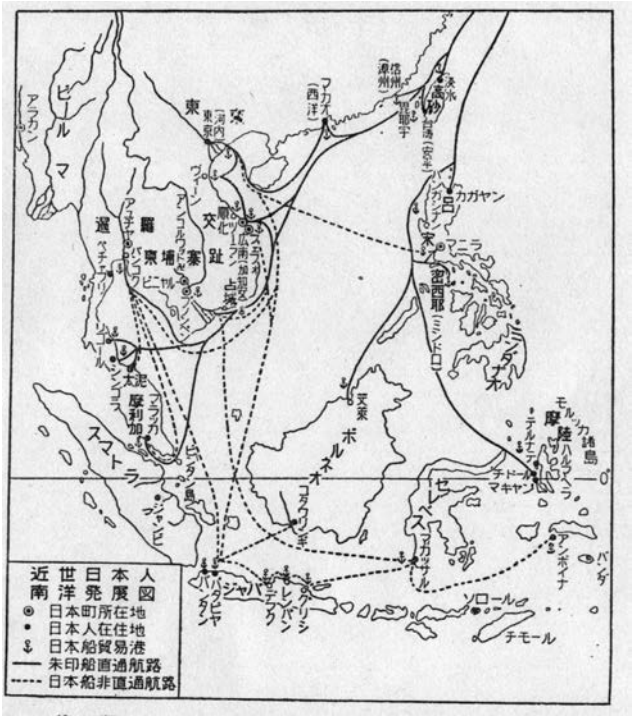


図２　岩生図1941　出典：岩生1941


近世日本人
南洋発展図
日本町所在地
日本人在住地
日本船貿易港
朱印船直通航路
日本船非直通航路
東京
交趾
暹羅
東埔寨
占城
ビルマ
アラカン
スマトラ
ボルネオ
セレベス
ジャワ
バタビヤ
ソロール
チモール
カガヤン
マニラ
ミンダナオ
モルッカ諸島
バンダ
アンボイナ
ハルマヘラ
テルナテ
チドール
マカサル
ジャンビ
ムラカ
ポンティアナ
ランガット
ジャンビ
ムラカ
ポンティアナ
ランガット
ジャンビ
ムラカ
ポンティアナ
ランガット

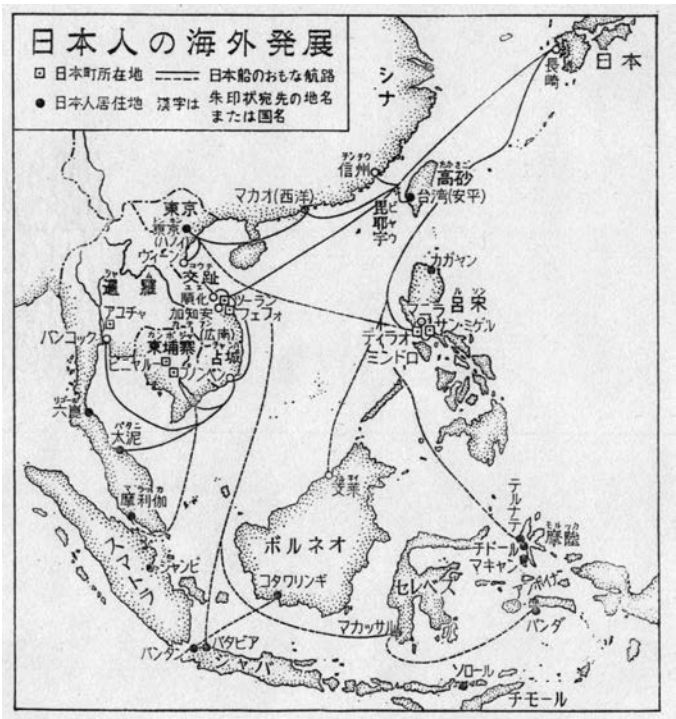


図 5　岩生図1966b　出典：岩生1966b：211

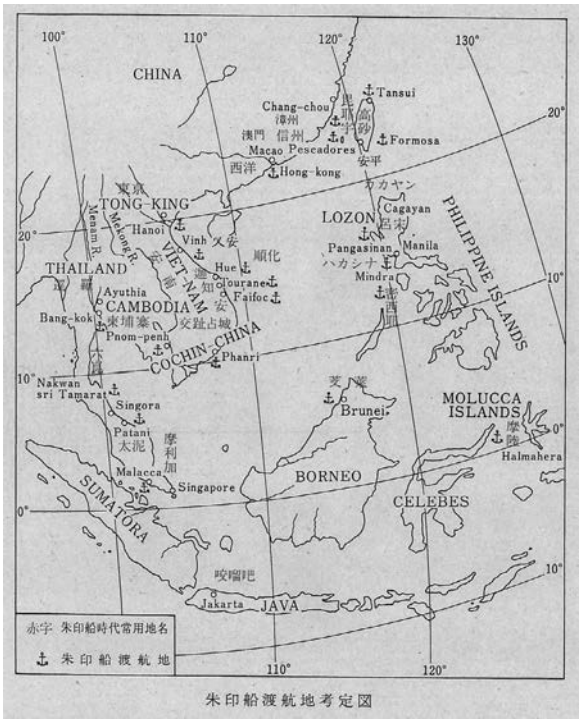


図 6　岩生図1985a　出典：岩生1985

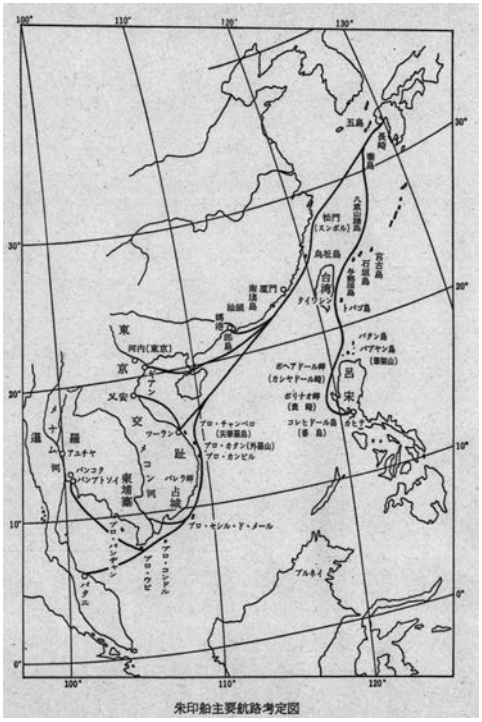


図 7　岩生図1985b　出典：岩生1985：193

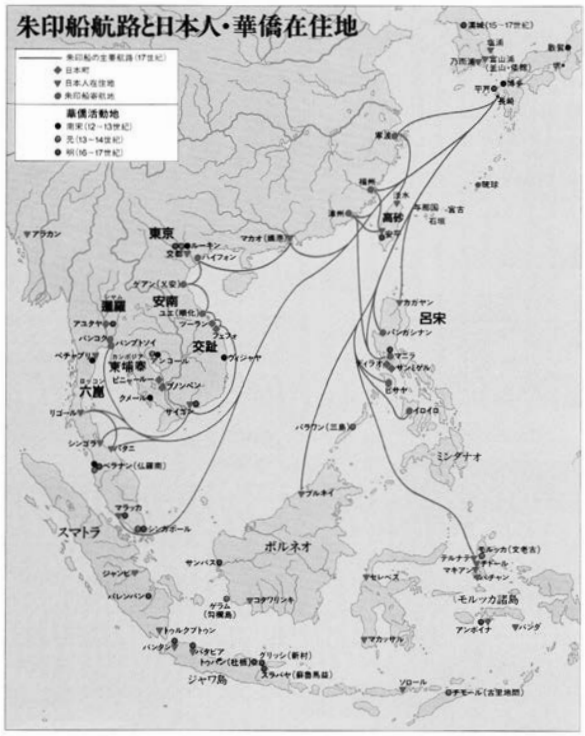


図 8　朝尾図1986　出典：朝日新聞社編1986：269

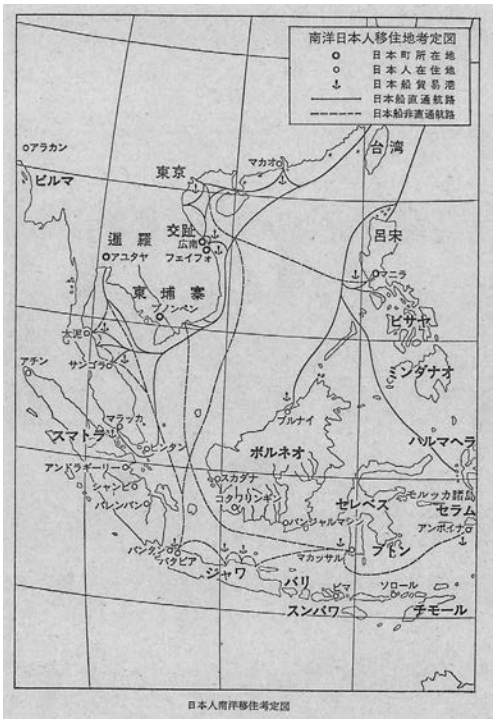


図 9　岩生図1987　出典：岩生1987

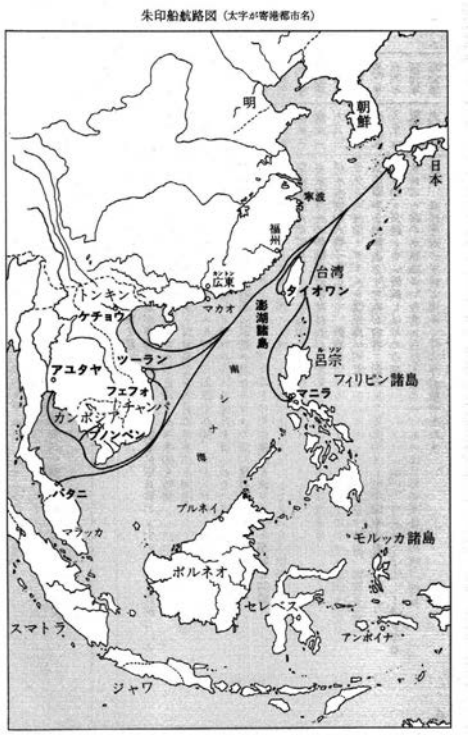


図10　永積図2001　出典：永積2001：237

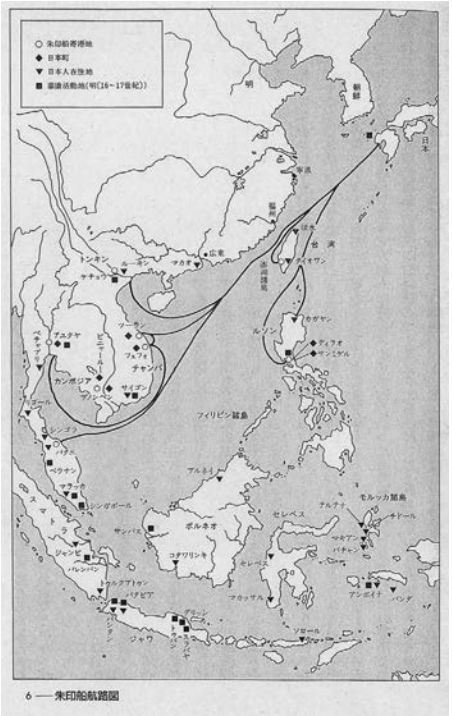


図11　荒野図2003　出典：荒野2003：31

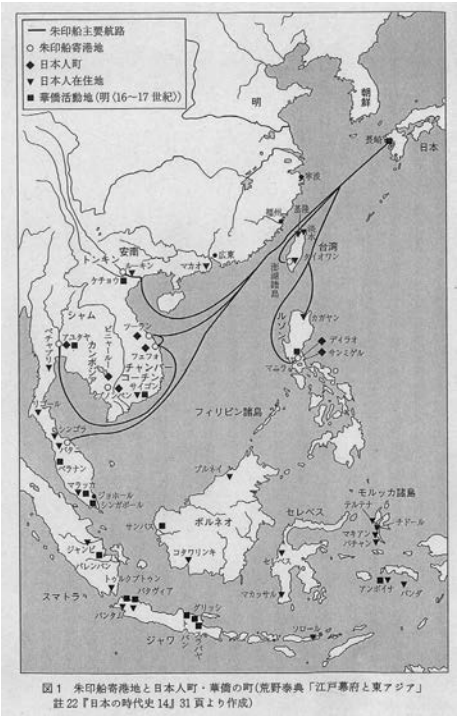


図12　木村図2014　出典：木村2014：119

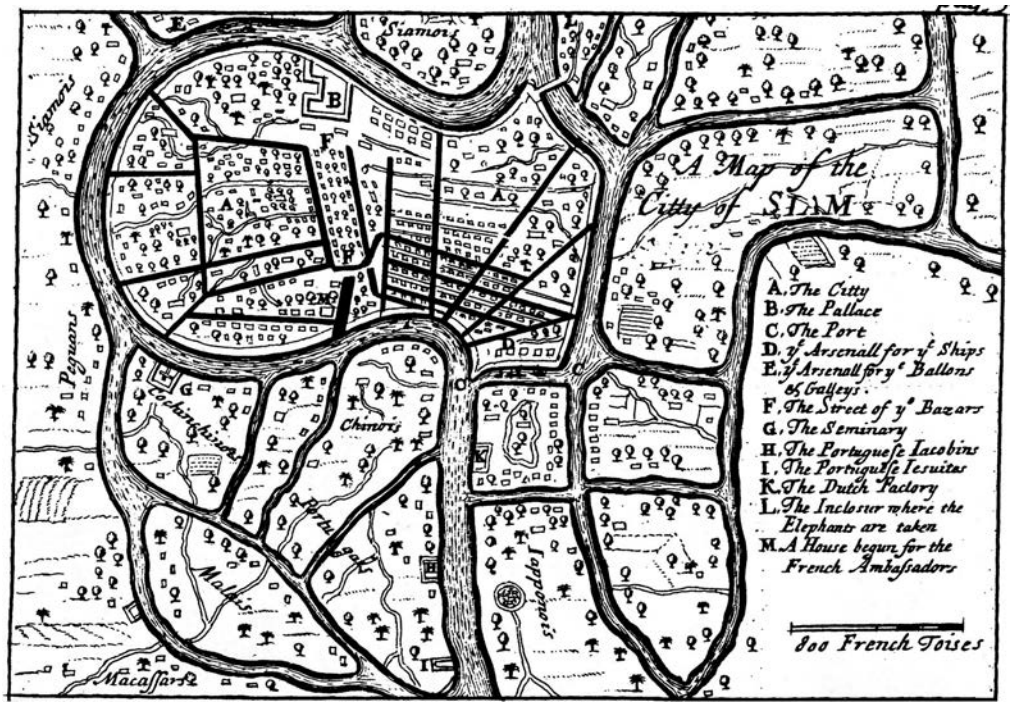


図13　日本町の位置　出典："A Map of the City of Siam"［La Loubère 1986（1693）］

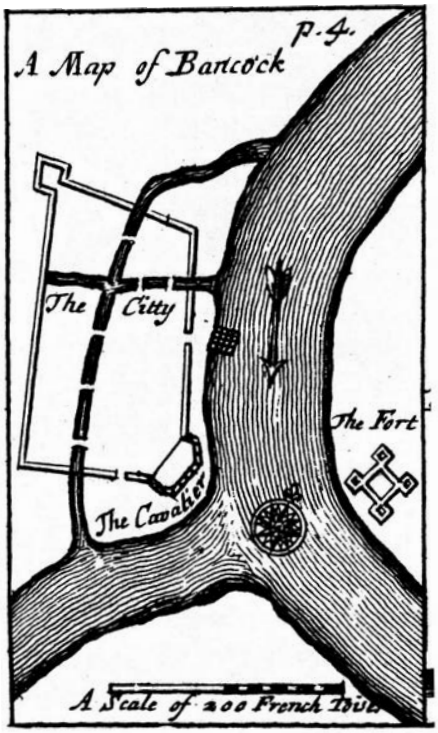


図14　バンコクの位置　出典："A Map of Bancock"［La Loubère 1986（1693）］

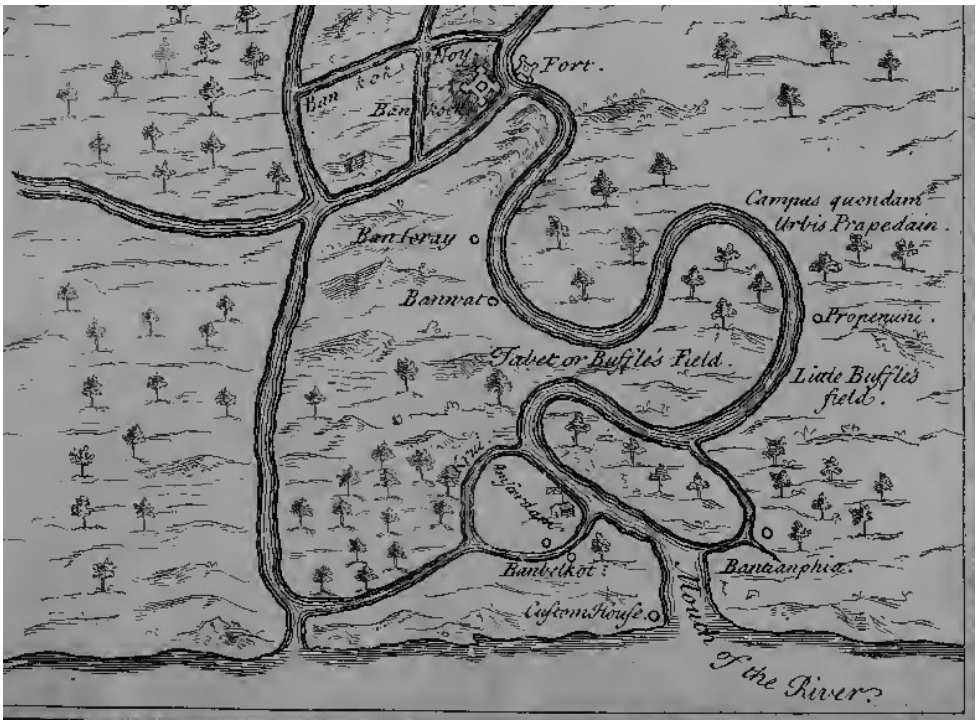


図15　“Bantiauphia”　出典：“Mappa Meinam”［Kaempfer 1906（1727）：vol. 1, 77］

図16　“Banplasoi”　出典：“A Mapp of the Kingdom of Siam”［La Loubère 1986（1693）］